冥王ハーデス
R18
ADULT ONLY
SAINT SEIYA Hades x Seiya

★聖戦のIFストーリーになります。
詳しい描写はありませんが星矢以外の青銅達、アテナは…となりますので
そういった設定が苦手な方はお避け下さい。
★ハーデス→星矢で陵辱(最後はちょっと救いあり？)

——俺は…
どうしたんだ…？
…あぁ そうだ
黄金聖闘士達の
決死の覚悟で嘆きの
壁を突破して
神の道を通って
エリシオンへと
辿り着いたんだ
そこで…双子神
タナトスとヒュプノスに
対峙したが…
神聖衣に目覚めて
タナトスを撃退
することが出来た

アテナ!!

そうだ…!

アテナは大がめに捕らえられていて助けようと技を放ったら…

今助けるぞ沙織さんーッ!!

それから…

…俺は気絶してしまったのか?

ピクッ

くっ…寝てる場合じゃない…!

早く…アテナを助けないと…っ

ぐっ…

っう…

ぐぐっ

…く…っ…

……?

…なんだ？

体が…重い？

ぐぐっ…

――ッ！

神聖衣が元に…！

気絶してたせいか!?

しかも…この花はなんだ？

見たことがない花みたいだが…

――ほう

まだそこまで動けるか

しぶとさだけは流石よな

だ…誰だ!?

はっ☆

いやそれより
アテナ…
アテナはどこだ!

確かに
そこに…!

神話の時代から
アテナと共に
余の邪魔をしてきた
だけのことはある

ピキャッ

…小宇宙を
感じぬならば
気付いて
おるのでは
ないか?

あの小娘ならば

お前が眠っている間に
他の聖闘士共々
還してやった

チャキッ

輪廻の輪へ

余　自ら
この剣でな

……

冥王――

お前は…まさか

余は冥王ハーデス

なんて…深い湖の底のような色…

悲しさを感じさせる美しい瞳なんだ…

くいっ

んっ…

なっ…!?

!?

?

えっ…

なん……ッ!?

何が起こって…?

力が…抜け……

トロッ

ぷるぷる

な…
何を…ッ
ケさッ
かあっ
…まあ
アテナも只では
転ばなかったがな
己の全小宇宙と
引き換えに
余のグレイテスト
エクリップスを
破りおった
アテナ…
姉さん……
安心するがいい
地上やお前の姉は
無事だ
アテナのお陰でな
忌々しい
小娘め…
今生も地上を
余の手にする事は
叶わなかった
だが
ピシ
ミシッ

パリィ

なッ…

聖衣が…!

ペガサス
お前は二度と
還さぬ

ピキン

地上にも
魂の
輪廻にもな

いくぞッ

今
ここで

冥府より深き
闇に堕とし
染め上げて
くれる

――ッ
ならばせめて…皆の代わりに差し違えてでも討たなきゃならないのに…ッ
――フッ
冥界の花に小宇宙を奪われても尚その闘志は褒めてやろう
くっ…力が入らない…ッ
だが無駄な抵抗はせぬ事だペガサス
アテナ亡き今生での今お前の役目も終わったのだからな
アテナ…ッ
……ッ
この花は小宇宙を奪うヒュプノスの花
びくっ
暴れたければ暴れても構わぬ
不覚にもお前達にやられたが奪った小宇宙でいずれ双子神も復活するであろう
人とは違い神だからな
!?だったら尚更大人しくなんか…ッ
ボッ

パチン

お前が暴れて余に逆らう姿を見れば見るほど

ムラッ

お前を屈辱に塗れさせ余の闇色に染め上げる楽しみが一層増すのだからな

ぐっ

バサッ

びくっ

ちょっ

なにしてッ!?

っ……

あっ……

ぴくっ

ちゅっ

どうした？

もっと好い声で啼いてもよいのだぞ

ぴくっ

ん…っ

チュッ

ぎゅっ

ぁ…っ

だ…れが…ッ

ズルッ

なんで…

ビクッ

こんなッ…

やめ…ッ!!

すると

気が…ヘンになる…ッ

ビクッ

フフ…

だが身体は正直なようだな

なに恥ずべき事ではない

フニャ

すると

あっ

ビクッ

ビクッ

人も神もこの本能には逆らえぬ

うっ…

そして今この場では無粋よ

思う存分啼けペガサス

あっ

ニチュ

ニチュッ

ビクッ

ビクッ

ひッ

あっ

んあッ

なんで…こんな……ッ

ビクッ

ビクッ

俺…ハーデスにこんな事…ッ

フ…
何故……か？
ぴくっ
今のお前は何も知らぬであろうがな…
ザワッ
ハマ…
今はもうないが
神話の時代余の肉体に傷をつけた唯一の人間……
それが当時の聖闘士
ペガサスよ
今まで何者も侵入を許さなかったこのエリシオンに踏み入り…
再び余の前に現れたのがそのペガサスの聖闘士とはな…
皮肉だと思わぬか
ハッ ハッ

ぬちっ

——だが

ドクン

いッ…!?

お前の姿を見た時 余は悟ったのだ

ヌル

ヌチュッ

ビクッ

ただ輪廻に還すだけでは同じ繰り返しになる

アテナの傍に常に付き従うペガサスを

ズッ

ポン

ひぁッ

魂ごと闇に堕とせば二度と余の邪魔立てにはならない

あっ はっ

ぴくっ

何よりその力…ただ消滅させるのも惜しい

グ チュ グ チュッ

ズポ

あっ あ あ あ

ビクッ ビクッ

余に堕ちよ

ペガサスよ

……っ

どんなに汚されても…

この身を…八つ裂きにされても

ポタ…

……俺は……っ

聖アテナの聖闘士だ…ッ!!

はっ

はっ

……

あぁ…

それでいい

ゴクン

ピタ…

それでこそ我が宿敵ペガサスよ

だからこそ

えっ…まッ…!?

ズバッ

ぐあああ

貫き甲斐がある

や…やめっ

苦しい…
熱…い…っ

んあッ!!

お前のナカに
余を感じるだろう?

余も感じる…

お前のナカの
熱さも
忌々しいアテナの
小宇宙もな

ズキュ

ズプ

あっ
びくっ

ヌ

パッ

パキュ

ビッ

お腹んナカ…擦れて……ッ

あぁっんっ

はぁっ

あっ

触れてる肌は冷たいのに……

熱くて…ジンジンする

頭の中がチカチカする…ッ

あっ…

さあ……ペガサス

冥王の恵みと祝福だ

ズズズキュ

ズズ

ズ

ガ

——あっ

あ……

っ…はっ

ドクッ

ナカに注がれてる……

ビクッ

熱い……

ドクッ

でも終わった…

ビクッ

あっ…あ…あ…あ…

は…あっ

はっ…

はっ…

まだだぞペガサス

ぐいっ

ぶるんっ

ドゥッ

んあッッ!?

ズギッ

ズイッ

ズブッ

あぁっ…

ゴクッ

ゴクッ

んッ

くくっ…

すっかり解れて感じておるではないか

スプッ

ズプッ

あっ
やめ…ッ
ぶすっ
これ以上…
もう…ッ
ひっ
ぶすっ
ぶすっ
ぶすっ
まだ
足りぬ
もっと余で
満たされよ
ペガサス
そして見よ
ぐいっ
!?

聖衣が黒く…!?

余の小宇宙を精と共にお前の中に注いでおるのだ

ブシュッ

その聖衣が闇色に染まりきった時…

お前は魂ごと余の冥闘士に堕ちる

な……

ドクーン

あっ

そんな…

嫌だ…ッ

ぎゅ

ぎゅぎゅぎゅ

だが

代わりに
ペガサスは
戴く

余の手で魂を
全て染め上げ
輪廻に戻る
こともない

次に貴女が
生まれ落ちた時
もうペガサスは
傍にいない

貴女が愛した
ペガサスは貴女の
敵となって
立ちはだかる

この次に
まみえる時は

……

……
ですが

例えそうなった
としても私は
地上を守る為に
戦うのみです

ガクッ

貴方の心を
そのように動かせた
彼ならもしかしたら

ハーデス…
貴方の人間への考え方を
変えてくれる……
そんな気もするのです

ハーアアアッ

……

……

最期まで
貴女は愚かだ

ザアッ

……

余の考えは
変わっておらぬ

ペガサスを余の走狗として闇に堕とし アテナの戦力を奪い 地上を手に入れる

…だが少々……

人間の熱に浮かされたのやもしれぬな

人間だけが持つ

命という温もりが存外心地よいとはな

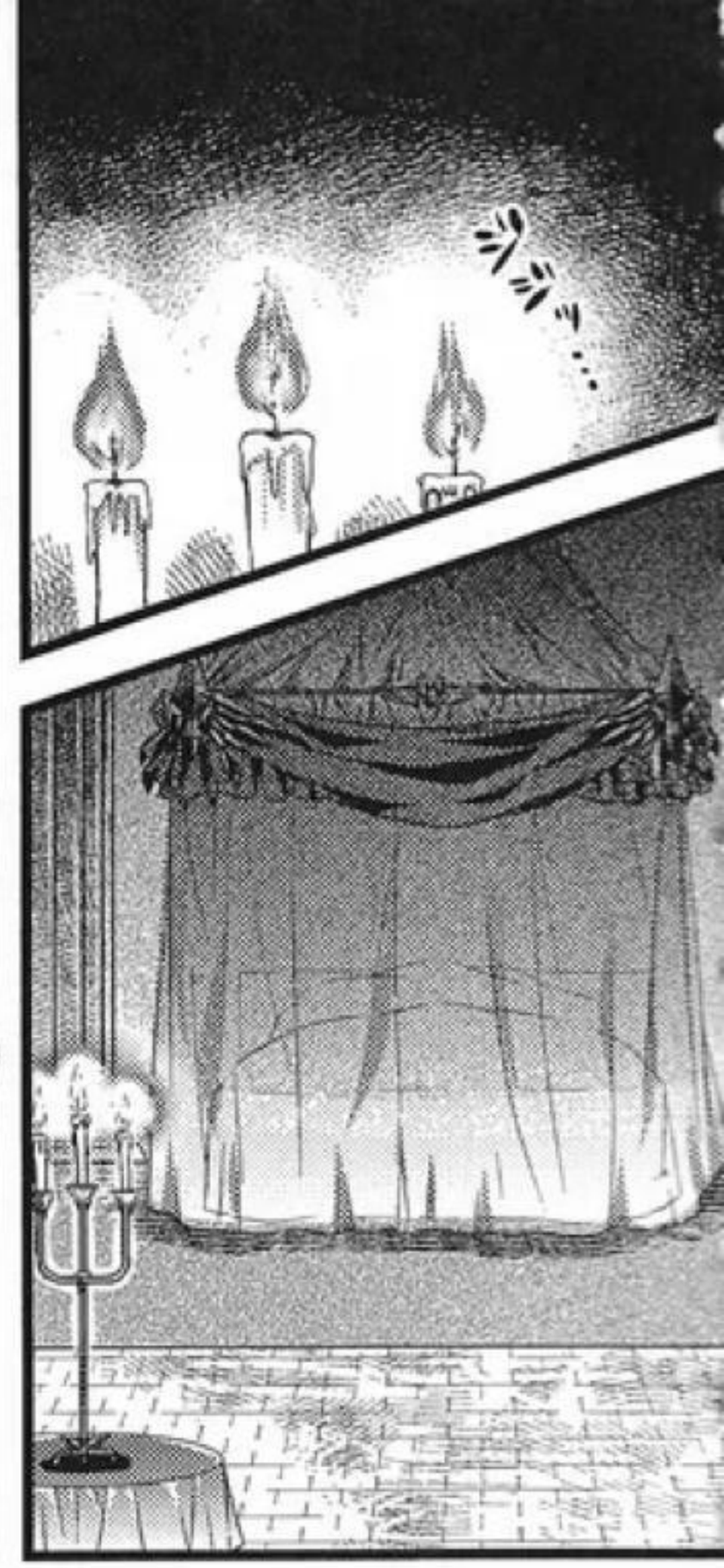
ペガサスよ

アテナの思惑通りになるかどうかは

お前次第だ

サーッ

ズキ
あと尻…
こっ…
腰が……っ
ズキ
ズキ



…さっ
沙織さんッ!!
ガバッ

ここは……
寝室？

俺は……

冥闘士になってしまったのか…？

え…

冥衣化してるのは右手だけ…？

目が覚めたか

身体は大丈夫か？

ハーデス！

おま……

す

聖闘士とはいえ人間は神より脆いからな

……ッ!?

ーっ

かぁぁぁ

は…
離せよっ

ぱしっ

かあっ

――っていうか俺本当に冥闘士になっちまったのか!?

フッ
聖衣を見れば理解できるであろう

一気に堕としてしまうのもつまらぬからな

ガバッ

トク

トク

エリシオンでは時間など概念は無く無限にある

その為にその粗末な聖衣を纏わせたままなのだからな

――…っ

あれからどの位経ったんだ

姉さん…

地上が気になるか

もう二度と戻ることはないが

最後に見せてやってもよい

――！姉さん!!

ああっ…本当に姉さんだ……!!

日食が終わって暫く経つが…星矢達は無事なんだろうか…

少なくともハーデスの野望は阻止できたんだろうけどね…

…星矢

…姉さん

ずっと探してた…やっと…見つけた姉さん……っ

思会やっと…会えると思ったのに…

これで地上と決別する

これで未練もあるまい

もう今生では人間の姉と会うこともない

いずれアテナが転生するであろうがそれまでにはアテナも地上も捨てられるよう愛でてやろう

会えない？

ふざけんな…ッ

……帰る

バッ

そうだ例え何百年かかっても…！

俺はアテナの聖闘士だ！

冥闘士にもならないし絶対に地上へ帰る!!

絶対に!!

……

ふむ

――って聞いてんのか

なん…っ

んぅ…!?

ふっ…

もぞ

もぞ。

よっ…!?

ぐいっ

バサッ

んぅッ！

ゴクン

ゲホッ

ゴホッ

ゲホッ

甘ッ…ノ…ゲホッ…熱ッ!?

神の酒ネクタルだ余のとっておきだがお前にはまだ早いか

だがそれでこそ余が認めたペガサスよ

ケホッ

もっと余を楽しませてみよ

余を飽きさせたら地上を滅ぼすのも一興だな

はぁ!?

その聖衣が全て闇色に染まりきる前に

ぐっ

もっとお前を支配する悦びを余に与えるのだ

んん…ッ ふ…っ

びくんっ

どうした？

もう抵抗はできぬのか？

こ…腰が痛くて力が入んないんだよ！あんたのせいでな！

…っていうか

なんでそんな…

…やっぱりさっきの夢は沙織さんなのかな…

む～…

さっきとは別人みたいに嬉しそうに微笑んでるんだよ…

——という事で私達が輪廻を巡ってる間にハーデスを愛に目覚めさせるのです！

えっ ちょっ

ちょっと沙織さん 俺さっき ナニされてたと!?

眼福でしたよ？

きゃっ♡

みてたのかよ!!

でもあのハーデスが…唯一興味を持った人間が貴方なのです 星矢

かぁあぁっ

そーなのかな〜…

最初は無理矢理でしたけど貴方を痛めつける訳ではなかったのがよい証です

あ でも敵として立ちはだかった時は容赦しませんので

戦女神ですから♡

ひでぇ…

ええ〜…

——人間の素晴らしさは人間として生きた私にはよく解ります

それをハーデスにも少しでも伝えたい…解って欲しいのです

人も神も存在が違えどきっとわかり合えると信じてます

アテナ…俺に…何ができるのかわかんないけど…まぁそういうなら…

そーいうことですので

経過楽しみにしてますね♡

オホ ホホホ

そして冒頭に戻る

えっっさっ…沙織さ～んッ!!

正直夢であって欲しいんだけど…

丸投げかよ―…

もぐもぐ

って…あの…ナニをやって……？

先程の続きであろうまさかあれで終わりだと思っておるまいな？

ぷっ

ミシッ ミシッ

前途多難…っ

ちょっ…あ

END

特別な椅子をもう一つ

柊むつみ

『なんか、お貴族様みたいだな』
「お貴族様じゃなくて神様だ」
冥王の法衣ではなく、漆黒のスーツを着て地上に降り立ったハーデスに、星矢は率直な感想を言った。星の子学園へ続く街道はそんなに人が多くはないが、通り過ぎる人がみんなハーデスを振り返る。
「その服どうしたんだ？なんだか高そうだけど」
「パンドラが用意してくれた。冥王ともあろう者が安物の服などありえないとあつらえてくれたんだ」
「へぇ、さすがだな」
礼節を重んじる彼女らしい気配りだ。そして、よく似合っている。
「でも、今日行くところって、結構服を汚しがちなんだけど大丈夫かな。帰ってからパンドラに叱られねえかな」
「パンドラが余を叱ることなどないから大丈夫だ」
「……俺が叱られそう」
「なら、余が叱らないよう伝えておこう。パンドラは優しい女だ」
それを聞いた星矢はポリポリと頬をかいた。ハーデスにはそう見える…というか、彼女はそう接しているのだろう。人は一面ではない、角度によっていろいろな色合いを見せるものだ。
「おっ、見えてきたぜ！」
「ほう、あれが星の子学園か」
古い園舎が目に映る。久々の故郷に星矢の表情も、やや幼げになる。
「思っていたより大きな家だな」
「みんなの家だからな」
星矢が屈託のない笑みを浮かべて、大きく手を振って叫んだ。
「ただいま、みんな！」
美穂や子供達が温かく出迎えてくれる。星矢は冥界の神ということは隠して、ハーデスのことを紹介した。貴公子然としたハーデスに最初は気圧されていたようだが、どことなく面影が瞬に似ていることから、美穂はすぐになごやかな笑みを浮かべる。
「よし！俺とサッカーするやつ、いるか！」
星矢がサッカーボールを手に、園庭の中央に駆け出す。子供たちが続いて駆け出し、まるで子犬のようにボールを蹴りあう。ハーデスはひさしの下で様子を見ていた。日陰から見る星矢は心なしかいつも以上に輝いて見える。
「よかったら、お茶をどうぞ」
「ああ」
美穂がいれてくれた麦茶を口にする。冥界にはない変わった味だ。だが、不味くはない。コクンコクンと飲み進めていく。
「瞬さんたち以外でここに来てくれたのって、あなたが初めてなんですよ」
「……そうなのか」
「あなたも沙織さんに関係ある方なんですよね」
「……まぁ」
ハーデスは言葉を濁した。関係があるにはあるが、敵とはまさか言えない。
「今、地上は平和なんですね」
「何故、そう思う」
「星矢ちゃんが帰ってきてくれたから。星矢ちゃんらしく過ごせるゆとりがあるんだなって」
美穂の表情は達観したような、それでいて内側に寂しさを秘めているような笑みを浮かべていた。
「ペガサスをずいぶん理解してるんだな」
「幼なじみだもの。でも、これから一緒にいれない時間の方が長くなっちゃうんだろうなって」
「……」
「星華さんみたいにギリシャまで追いかける根性は私にはなかったし。あなたの方が、星矢ちゃんに近いと思います。星矢ちゃんが無茶しないように見ててあげてくださいね」
「……ああ」

そう答えると、美穂はホッとした笑みを浮かべ、楽しげに話を続けた。
「沙織さんがむちゃくちゃな命令したときは怒ってくださいね。星矢ちゃんは道具じゃないんだぞって。なんならボコボコにしちゃってもいいです」
「そなたはアテナの友達ではないのか？」
素朴な疑問を投げかけると、美穂は表情を一変させて頬をふくらませた。
「ぜんっぜん！！私、沙織お嬢さん嫌いなんです！！」
「それは素晴らしい」
思いがけない賛辞に美穂はきょとんとした。ハーデスは今日一番の笑みを浮かべると、
「余もアテナは嫌いだ」
と、告げる。一瞬の間を置き、頬を紅潮させた美穂が興奮気味に言う。
「ハーデスさん、ケーキはお好きですか？」
その後、初の同志を得た美穂のおもてなしは、星矢への愛をしのぐほどだったと言う。

星の子学園での憩いを楽しんだ後、二人はヨットハーバー近くの星矢のアパートを訪れた。窓を閉め切っていたからか、部屋はどことなく埃っぽい。夕焼けが差しこみ、辺りを橙に染める。ハーデスはキョロキョロと見回すと、ぽつりと言った。
「……ここは物置か？」
「俺の家だよ」
「こんなとこに人が住めるのか」
「住めるよ…！ったく、こういうとこは沙織さんに似てるよな」
豪邸や城や宮殿に住み慣れてるからだろうか。嫌味ではなく本当にそう思っているハイソな発言がそっくりである。ハーデスは主に遠慮する気配を見せず、ベッドにごろんと寝転がった。
「でも、ベッドは柔らかいな」
「あんな硬い寝床で寝てたら、なんだって柔らかいと思うよ」
ハーデスの場合、あれは寝床というより棺桶に近い。肉体を大事にしてるわりに節々が痛みそうな管理の仕方である。ベッドに仰向けになり、四肢を投げていたハーデスが力なく呟いた。
「今日は疲れた……」
「なんか美穂ちゃんと意気投合してたな。あんな楽しげな美穂ちゃん見たの初めてだったよ」
「まあ、いろいろあってな」
「俺としても、仲良くしてくれるのはうれしいぜ」
純真無垢な笑顔を無言でやりすごす。星矢は汚れた靴下を脱ぐと洗濯機に放った。
「そんな服着たまま寝ると、皺になるぜ。貸せよ、ハンガーにかけてやるから」
星矢が手を差し出してくるので半身を起こすと、のそのそと上着を脱ぎ星矢に渡す。星矢がハンガーにかけている間に、ネクタイとシャツの一番上のボタンも緩めた。背中から夕日を浴びて暖かくて気持ちがいいが、いかんせんまぶたを閉じても明るさがなくならない。
「…カーテンを閉めてもらえるか？」
「せっかく良い天気なのに。今閉めなくても、もう少ししたら日が落ちるから、もうちょっと待ってもいいんじゃないか」
「太陽は嫌いだ。あと、子供も」
「なら、なんで星の子学園に行きたいって言ったんだ？」
「…ペガサスの生まれ育った場所を見てみたいと思ったからだ」
そんなこと言われたら表情筋が緩んで甘やかしてしまうではないか。星矢はコメントはせずにカーテンを締めてやる。カーテンが太陽光を遮断し、暖かみはありながら、部屋がいささか暗くなる。ハーデスは満足したようでもう一度ごろんと横になり、静かにまぶたを閉じてしまった。
「ペガサスはギターが得意だったな」
「まぁ、弾ける程度にはな」
「何か弾いてくれ。余は音楽が好きだ」
「ったく、ワガママだな」
軽く悪態つきながらも、ギターを取り出してくる。あぐらをかき、簡

単にチューニングをするとピックで爪弾き始める。スローテンポの穏やかな曲だ。ハーデスが心地よさげな声音で尋ねる。
「良い曲だな。なんて名前だ」
「さぁ…姉さんが歌ってくれてたのをうろ覚えで適当に弾いてるだけだから」
「ふうん…姉がいるのか」
「ああ。すっげー優しくて大好きだ」
「…わかる」
まぶたの裏にパンドラの姿が浮かぶ。普通の兄弟と違って、血の繋がりはないし、身分の隔たりがあるのは感じているが、特別な存在だと強く思う。ギターの音色が静かに部屋に染み渡る。ジャズのように気の向くままに曲を奏でているうちに、日が落ちて次第に部屋が暗く陰ってきた。
「電気つけるか」
と、演奏をやめて立ち上がると、ハーデスが寝息を立てていることに気付いた。
「……キレイな顔してるんだな」
まじまじと見てみると、伏せられたまつげは長く、肌は陶磁器のように白い。瞬を依り代に選んだだけあり面差しは似ているが、瞬とは違う。髪形とかビジュアルの違いではない、魂から醸し出される何かがそう感じさせる。そう言えば、彼は冥界への入口であるドイツからやってきたのだった。長旅の疲れもあるのかもしれない。返答次第ではこのまま寝かせておいてやろうと、ベッドに腰掛け、そっと頬に触れながら、優しく囁いた。
「大丈夫か…？疲れてるなら、そのまま寝てもいいぜ」
しばらく待ってみたが、まぶたが動く気配がない。星矢は微苦笑を浮かべ、おやすみを言おうと唇を動かそうとした時、ふっと頭を引き寄せられ、言葉を封じられた。
「ん……っっ！？」
それが唇を奪われたのだと気付いたのは、人肌の熱がじんわりと伝わってきた頃だった。自分の頭を優しくも強く抱える手が名残惜しそうに離れると、星矢は弾かれたように跳ね起きる。頭が真っ白になりながらハーデスを見れば、黒真珠のような瞳にぶちあたった。
「お、おまえ…起きて…」
「この距離で起きない方がどうかしている」
ハーデスは艶然と笑う。
「な、なんで…キス…」
「好きだからだ。それ以外の理由が必要か？」
頭が真っ白でどう反論していいか分からず、星矢は金魚のようにロをパクパクさせるばかりである。
「余のキスはどんな味がした？」
「……生クリームとイチゴ……」
「奇遇だな、余もそう感じた」
星の子学園で美穂が出してきたのだから当たり前だ、と叫びたいが、言葉にならない。
「…美穂ちゃん、料理上手だからな」
我ながら頓珍漢なこと言っている自覚はあるが、これが精一杯である。動揺がだだ漏れの星矢に、ハーデスは余裕の笑みを浮かべる。
「アテナとはキスしていないのか？」
「するわけないだろ」
「欧米では、挨拶にキスは常識だぞ」
「ここは日本だし、俺も日本人だし…あ、そっか。あんたもそのつもりなのか」
ホッとしようとした矢先に、ハーデスがとんでもない発言をする。
「いや、余は恋人にするキスのつもりでした」
「はっ！？」
「余はペガサスを抱きたい」
「なにぃ！？」
ハーデスがゆっくりと身を起こす。緩めたシャツの隙間から、わずかに肌が覗き、星矢は無意識に後退った。その様にハーデスは楽しげに口元を緩めた。
「抱く…の意味はわかってるか？抱きしめるという意味ではないぞ。

そこまで子馬ではないだろう？」
「あ、ああ・・・俺は天馬だぜ。それくらいは分かるさ」
「そうか、それはよかった」
ハーデスがうれしげに微笑んだところで、星矢は、あ・・・っと小さな声をもらした。プライドを優先させて、煙に巻くチャンスをフイにしてしまった。どうすればいいのかもうわからない。くしゃっと顔を歪ませたとき、
「そうか・・・順番を間違えていたな」
ハーデスがわずかに眉を下げ、自嘲ぎみに笑った。どういうことなのか分からず、反応を返せないでいると、ハーデスは緩めていたシャツの襟を正し、ネクタイを締め直した。そして、どこで覚えたのか、ベッドの上だというのに正座をする。ゆったりと穏やかな笑みを浮かべると、かみ締めるように言葉を紡いだ。
「私は星矢が好きだ」
トクン、と水の波紋が広がるように優しく響いたのは、自分の心にきちんと届いたからかもしれない。
「本気・・・なのか？」
「神は嘘はつかない」
ハーデスの真摯な瞳と揺るぎない言葉に、体の強張りが緩み始める。
「俺・・・アテナの聖闘士だぜ？」
「私は肩書きに縛られたりしない。そして・・・お前の生き様までは奪いはしない」
星矢の目が丸く大きく見開かれる。
「それは、たとえアテナでさえできないことだろう？」
なぁ、とハーデスが訳知り顔で言う。彼との聖戦のおりに、沙織が抹殺命令を出してまで、聖域に近づけさせまいとしたことを聞いているのだろうか。
「お前は、お前として何も失うことはない。だから、恐れるものはなにもない」
傷のついたことのない白くて美しい手が、すっと自分に差し伸べられる。まるで、ダンスを申しこまれているかのようだ。ハーデスは何も言わず、そのまなざしで待ち続ける。すっかり帳の下りた部屋で、星矢の手がぎこちなく動く。少しずつ、ゆっくりと。しかし、確実にハーデスに伸ばされる。星矢の指がわずかにハーデスの手のひらに触れるが、広げたまま動かない。そうして時間をかけ、手のひらと手のひらが重なり合ったとき初めて、ハーデスが手を握った。
「・・・・よく選んだ」
ニヤッと微笑むと、グイッと引き寄せ抱きとめる。星矢はまだ体を固くはさせていたが、怯えてはいなかった。透き通る瞳をみつめながら、吐息のかかる距離で体温を感じあう。
「あんたもあったかいんだな」
「生きてるのだから、当たり前だろう」
ハーデスが星矢の頬に口付けを落とす。場所を変えて二度三度。奪うというよりは与えるような優しい口付けに、不思議そうな顔で言った。
「・・・あんた、意外と優しいのか？」
「余は嘘も偽りも言わないし、自分の戦士が不要に傷つくのは見たくない。大切なものには優しくしたいのは、人として至極当然じゃないのか？」
「神のあんたが人としてって」
プッと吹き出した星矢に、ハーデスが耳元で囁く。
「あまり余を特別扱いするな」
それはゾクリとするほど色っぽい声で。心臓が跳ねた瞬間に、体がひっくり返され、スプリングが弾む音と共に、天井とハーデスが映される。茫然としてる間に、ハーデスの指が服の隙間に潜りこむ。
「・・・んあっ」
快感を帯びた吐息がもれ、恥ずかしさからか、星矢がきゅっと瞳を閉じる。ペガサスの初鳴きに気をよくしたハーデスが、より深い快感のツボを求めて指を這わせる。鍛えられた筋肉を指で押せば、キュウッと反応し跳ね返す。その感触だけで興奮できる。もっともっと触れたくてたまらなくなり、首筋にキスをした。
「あうっ」
ビクンッと体が跳ねる。這わせた指が乳首に触れると、星矢は耐える

ように頬を赤くして顔を背けた。
「うれしいが、少し寂しいぞ」
チロリと赤い舌をだし、まぶたを舐める。ぬめっとした感触と、離れた後のひんやりとした感覚に星矢が思わず目を開ける。その瞬間を狙ってアゴを掴み、深く口付ける。
「――――んんっ」
星矢の舌が逃れるように動き、ハーデスはそれを追う。クチュクチュ・・・と粘度の高い水音が響く。
(息・・・・・できねぇ・・・)
脳に酸素が足りなくて、クラッとする。唇の端からは、どちらのものか分からない透明な唾液がツーッと垂れた。夢中でキスをせがむ目の前の男は、額に汗をにじませ、うっすらと肌を紅潮させている。ギリシャの彫像とは真反対の姿。
(でも、こういうのも・・・綺麗かも)
ふんわりとした気分を味わいながら、クチュリと無意識に舌を絡ませた。堪能していたのは、どれくらいだっただろうか。不意にハーデスの唇が名残惜しげに離れる。スゥ・・・と新鮮な空気を取り込み、胸が軽く上下する。
「・・・あっつい・・・」
ふと漏れた言葉に、ハーデスがニヤリと笑う。
「そうだな・・・邪魔だな」
おもむろに星矢の襟ぐりに手をかける。脱がすのではなく、破こうとしているのだと察した星矢が慌てて制止する。
「ちょ、待てよ。何しようとしてるんだよ」
「こっちの方が早くてラクだろう。今更嫌がるのか?」
「そうじゃなくてっ。俺、服、全然持ってねえんだよ。破られたら困るっ!」
確かに自分と会う時、わりと近い頻度で同じ服を見かけていた。お気に入りなのかと思っていたが・・・・・。
「貧乏だな」
「貧乏だよ、悪いか!」
仔犬のように怒るお前も愛らしいと思うなんて、どうかしてるんだろうか。
「いいよな、あんたは金持ちだから」
思わず浮かべた笑みを、嘲笑と受け取った星矢が悪態をつく。ご機嫌が悪くなってしまった目の前の愛しい人の髪を優しく撫でると、金持ちの象徴にも見える自らの衣服をあっさりと脱ぎ去り、遠くへ放った。一糸纏わぬ姿に、星矢が目を丸くする。
「魂の高潔さと貧富はまったく関係ない」
星矢を慮って服の裾に指をかけ、一気に半身を露にさせる。汗ばんだTシャツを放り捨て、ジーンズに手を伸ばそうとすると、羞恥に顔をにじませた星矢が抵抗を試みる。
「ちょ、その・・・」
「・・・服を破かれたくないんだろう?」
一瞬、怯んだのを見逃さず、パンツもろとも引き摺り下ろすと、床に放り投げた。脚や手や、体の至る部分が触れあい、服の上からでは分からなかった温もりと官能を生み始める。
「これが全てだ」
淡々とハーデスは告げた。
「どれだけ着飾ろうとも、残るのは肉体と誇りだ」
「知ってるよ」
孤児だと揶揄されたときも、聖域で日本人だと嘲笑われたときも、心を支えたのは、この一言。
「俺は、俺だ」
――そう断言できるお前は何と美しいのだ。
それを伝えられる語彙を自分は持たない。肌に薄く刻まれている傷痕もお前しか持たない唯一のもの。使いこまれた輝きをいつまでも愛でていたい。
「どうしたんだよ、ボーっとして」
「・・・なんでもない」
首を小さく横に振る。見惚れすぎて、時を忘れていたようだ。星矢が

わずかに身を起こし、ハーデスに囁いた。
「いいぜ、いつでも」
力強く、まっすぐで、それでいてほんの少しはにかんで。太陽は嫌いだが、この光は生命の熱さだ。肌と肌で隔てていることさえもどかしい。早くもっと昂ぶる熱を味わいたい。一刻も早く挿入したいが、理性がそれを思い留める。
「始めるぞ」
星矢の秘所に指を、ちゅぷ…と忍ばせる。ウッという呻きと共に、指が締め付けられる。
「力を抜け。辛いだけだぞ」
「…んなこと言われても…」
痛みを感じてるのか、表情をゆがませている星矢の乳首に吸い付く。
「んあああっ！」
星矢の体がビクッと跳ねる。その動きを利用して、指を奥へと進める。じっくり時間をかけて柔らかい体内を弄っているうちに、
「ん…あぅ…」
頬を赤らめ、与えられる刺激に身を委ね始める。指をもう一本挿れると受け入れようと腰を動かす。ハーデスが前立腺に近い腸壁をひっかくと、甘い嬌声と共に体を震わせた。
「気持ちいいか？」
「…わ、かんねぇ…」
息も絶え絶えに答える。下腹部の自身は熱く高くそそりたっていた。ハーデスは身体を起こし、空いている手でそれを扱きにかかると、数段声を高くして鳴いた。嬌声の合間に、懇願の言葉が混じる。
「やめ……っ、それ、やだ…」
自分では予測のつかないタイミングと刺激に、心と体が翻弄される。内と外から幾度となく攻め立てられ、
「ッッ……イクッ…！」
ビクッと身体を弓なりにそらして、ハーデスの手を白濁液で汚した。
（やばい、頭、ボーッとする）
雑念がどこかに吹っ飛んだ感覚。愉悦の笑みを浮かべるハーデスに、何のアンテナを張ることも出来ない。自分がどんな表情を晒しているか、それすらも分からない。

――生まれたての子馬みたいだな。

潤ませた瞳に、緩んだ口。ほぐれて柔らかくなった肢体。無防備を体現した無垢な姿に、いよいよ覆いかぶさる。指に纏わり付く星矢の白濁液を自らの潤滑液にして秘所へ進入する。
「――――っ！！」
星矢が声にならない声をあげ、ハーデスにしがみつく。爪を立てて、身体を震えて痛みをこらえる。
「痛みには慣れてるんじゃないのか？」
「俺はロボットじゃねえよ…っ」
痛みを感じないわけじゃない、と伝えたいらしい。
「なら、快楽はどうなんだ」
収めかけた自身をギリギリまで引き、もう一度埋め込む。
「――――あああああっ！」
最も感じる部分を探して、様々な角度から穿つ。穿たれるたびに息混じりの声が吐き出される。
「ン…ッ、ヤァッ…」
「イイの間違いだろう？」
星矢が無言で首を振る。その貌は、赤く艶めかせながら。
「快楽は悪じゃない」
「…んだと…っ？」
「聖闘士はいろいろ我慢がすぎる」
言い切った瞬間に、ハーデスは動きを加速させた。星矢は自然に声をシンクロさせ、ハーデスは汗のにじんだ髪をかきあげ、呼吸をシンクロさせていく。二人の声とベッドのきしむ音と、グチュグチュという繋げる水音だけが耳に響く。完全に日の落ちきった中では、時の経過はもう分からない。
「俺…もう…ッ」
何度突かれたか分からない星矢が限界を訴える。ハーデスも、そろそ

ろピークを迎えると感じていた。この甘美な時間を終わらせたくない。だが、

――それも含めて、生きるということだからな。

わずかに笑うとハーデスは腰の動きを変え、激しく揺さぶった。ズンッとねじ込むように奥を突き、星矢が大きく鳴いた瞬間にドクドクッと熱い精を中に放つ。腹への奔流に電気が流れるような強い刺激を感じながら、星矢もまた精を放つのであった。

ふ…っと気がつくと、星矢はハーデスに腕枕されていた。

「起きたか」

ずっとみつめていたらしいハーデスが満たされた笑みを浮かべる。あれだけのことしたはずなのに、白濁の跡もなく、汗などがべたついた感覚もない。

（もしかして、夢だったのか……？）

そんなわけないのは、一糸纏わぬ姿のままな事と、全身の倦怠感と、特定の部分の鈍痛からすぐ分かる。

「お前の家には、絹の一枚もないんだな。手頃な布を探すのに苦労した」

ハーデスが眉をひそめる。無造作に置かれている布に頭を抱えたくなった。

「それ…台ふきんじゃねえか…」

――気持ちはありがたいが、俺はテーブルじゃねえよ…。

あの台ふきんは捨てようと誓った星矢の嘆きなど露知らず、ハーデスは楽しげに言った。

「なかなか可愛い寝顔だったぞ。寝返りうって無意識に抱きついてきたときなんか、起きてるときより素直だなって思った」

「昔は姉さんと一緒に寝てたから、ついその癖がでるんだよ」

「…ということは、余をお前の姉と同じくらい好いているということだな？」

思いもよらぬ発言に、星矢があっけにとられる。その表情にハーデスがクツクツと笑う。

「姉さんと比べるなんて、できねえよ。少なくとも姉さんとはこんなこと絶対しないから」

「ギリシャ神話では兄妹で結婚することも珍しくないのに」

「あんたらの常識でまとめるなよ。姉さんは俺の特別なんだよ。誰かと比較してどうとか言えないし、何を求めてるわけでもないんだ」

だんだん論点がずれ、ムキになり始めた星矢を、ハーデスは優しく諭した。

「心の玉座を奪おうなどとは考えていないぞ。最初に言っただろう、お前が失うものはなにもないと」

「……」

「椅子をもう一つ、増やしてもらえたらうれしいと思うだけだ」

なんだろう、挑発してきたかと思ったら、唐突に素直なボールを投げてくる。手で顔を覆い呟いた。

「……俺、負けそう」

「何かを競っている覚えはないが」

「もう…何も言うな」

この心臓のドキドキをなんと言えばいいのか、自分でもわからない。この気持ちを理解する時間はたっぷりある。なぜなら、彼は冥界の神。死さえも二人を隔てない。だから、ゆっくり。ゆっくりいこう。

「シャワーも浴びたいけど…メシ、なんとかしねえ？」

「ああ。何時に持ってきてくれるんだろうか」

上げ膳据え膳のお貴族様、もとい、神様とのコミュニケーションはなかなかに骨が折れそうだ。だが、思わず苦笑を浮かべてしまった。

――こういう面倒臭いの、案外好きなんだろうな、と。

END

ここまでお読みいただきありがとうございました！

念願のハデ星発禁本が実現できた事が夢のようです。
前回発行した本からまさかの10年振りとなってしまいましたが、
初めてのオールデジタル原稿で四苦八苦しながら
理性と戦いつつ(笑)何とか完成できました。
夢と妄想を詰め込んだ自己満足な本ですが
少しでもお楽しみ頂けたなら幸いです。

エリシオンで生活する星矢くんやハーデス様のその後…
な話も全く考えていない訳ではないのですが
機会があったらまたその時に。

またハデ星本が出せると良いなと願ってます♡
…つ、次はもっとお互い幸せなハデ星を目指したい…！

2017.6 都宮

Special thanks!! 柊むつみ様

2017.6.11 パラダイス銀河24
再版：2017.11.23

Chrosite+ (都宮)
mail nightmare2000scope-cross@yahoo.co.jp
twitter @chrosite_plus
pixiv 2352414

印刷 SUN GROUP
http://www.sungroup.co.jp/

無断転載・ネットオークション等への転売は禁止いたします。

2017.06 Chrosite+ Presents
SAINT SEIYA
UNOFFICIAL FAN BOOK VOL.6